

## ■ 第1回FD研究会報告

## 現代システム科学域における学際的な教育の試み

森岡次郎

現代システム科学域・現代システム科学研究科

## 1. 本日の報告内容

よろしくお願いします。本日は「現代システム科学域における学際的な教育の試み」について報告いたします。現代システム科学域の教育福祉学類に所属している森岡次郎です。私の専門は、教育哲学や教育思想史です。

旧市大の先生方にはあまりしっくりこないかもしれませんが、学域・学類というのは、差し当たり学部・学科と近い体制です。ただ、現代システム科学域・研究科では、他の学部・学科のように学士課程と大学院が同じ構成になっていないので、学域の教員が研究科を担当しないことや、逆に他の部局や機構（国際基幹教育機構）などで学士課程を担当している教員が、現代システム科学研究科に所属していることもあります。今回の報告は、研究科ではなく学域での教育の内容となります。とくに新大学で始まった取り組みについて、いくつか紹介させていただきます。また、時間があれば、2週間ほど前の松下先生の教育改革フォーラムの講演に触発されましたので、思うところを問題提起させていただきます。（章末スライド2を参照）

## 2. 現代システム科学域とは？

ディプロマ・ポリシーによると、現代システム科学域では、領域横断的応用力とシステムの思考力といった能力を身につけることが求められています。現代システム科学域に所属している教員の専門は、理系から文系まで様々です。（章末スライド3を参照）

学域は、知識情報システム学類、環境社会システム学類、私が所属している教育福祉学類、心理学類という4つの学類から構成されています。

現代システム科学域は、学際志向の教育組織です。アドミッション・ポリシーによると、「現代社会にお

いては、環境問題、社会・福祉問題、心理的問題が複雑に絡み合い、現在のような豊かな社会が持続可能かどうかは疑問視される状況となっており、これらの複雑な問題を解決し、持続可能な社会を実現するという高い志を持った人材の育成が求められています。本学域では、複数の学問分野を融合的に学びつつPBL（Project-Based-Learning）に取り組むことを通して、現代社会の諸問題を解決することができる人材を養成することを目指す」と説明されています。

上記はアドミッション・ポリシーの文章なので頭に入ってくるかもしれませんが、たとえば、最近流行しているSDGsの問題について。貧困やジェンダー、気候変動、教育、平和、平等といった問題は、いずれも単一の知識や視点だけで解決することが難しい問題です。こうした現代的な課題に取り組めるようになるために、現代システム科学域では、できるだけ多様な視点で学問を融合させながら学んでいくことを目指しています。ですから、本学域は、特定のディシプリン、学問分野に特化して教育を行うというよりは、解決すべき社会的諸課題にフォーカスをして、プロジェクトベースで多様な視点から教育や研究を進めるということを理念としています。（章末スライド4を参照）

## 3. 学際的オムニバス講義としての「○○システムとサステナビリティ」

学際的に課題解決を目指す、とは言うものの、私も含めて教員はそれぞれに学問の背景や所属している学会があり、専門性に特化した研究を行っています。教員自身は既存の学問的なディシプリンにとらわれていません。

そこで（というわけではありませんが）、1年生の前期には、全ての学域生280名程が受講する学域共通

科目「システムとサステナビリティ」科目群（4科目）を配置しています。「システムとサステナビリティ」科目群は、すべてオムニバス講義となっています。「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」という4つの科目は、現代システム科学域に入学直後の1年生が全員、必修で受講します。上記の科目は、大阪公立大学になってから新設されたものです。

私はこの授業を担当していないので、授業担当者の経験として紹介することはできないのですが、本講義は、システムの思考力を養うこと、現代社会の課題に対して多様なアプローチをしていけるようになることを目的としています。（章末スライド5を参照）

複数の教員が担当するオムニバス講義というのは、それほど珍しいものではないかもしれませんが、とはいえ、この4つの「〇〇システムとサステナビリティ」には特筆すべき、他のオムニバス講義とは異なる特徴があります。それは、それぞれの授業の15回目に、他の科目の担当者が登場して、教員同士で「座談会」をすることです。たとえば「自然システムとサステナビリティ」という授業の15回目に、他の「〇〇システムとサステナビリティ」を担当していた教員が登場して、「自然システムとサステナビリティ」で取り扱った授業の内容について議論します。他の授業の担当者が、それぞれの専門的な観点や、他の「〇〇システムとサステナビリティ」で扱ったテーマとの関連からコメントします。学生は全て必修なので複数の講義を聞いていますが、各科目の最後には、それらの科目の枠にとどまらず、授業担当教員の専門をも越えて、1つのテーマについて議論します。学生は、この「座談会」を聞くことで、科目間の関連を意識することができるようになります。

私も「座談会」の様子や、学生から提出されたコメントを見たのですが、この「座談会」の取り組みには、学生はかなり好感を持っているように思いました。「今までは授業を担当する先生の説明が全てだと思っていたけれども、ほかの観点があることに気がつきました」というようなコメントがありました。300名に近い受講者の講義なので、残念ながら今年度はオンラインで

の実施となりました。「座談会」はZoomで録画してYouTube等でアップするという形で行いました。講義室に教員が4人、5人と集まって、学生の前で、対面で議論すれば、また違った印象になったかもしれません。（章末スライド6を参照）

#### 4. 「座談会」の教育的意義

「座談会」と学生たちのコメントを見て私が思ったことは、当たり前のことかもしれませんが、世の中には問題に対する多様なアプローチの仕方がある、ということでした。ある特定の学問（方法論）が絶対ではないということ、さらに踏み込んでいえば、ある教員の言うことが必ずしも正しいとは限らないということ。複数の教員が、学生の前で多様な意見を表明することで、これらのことが伝われば良いと思いました。

また、これは新大学になる前からですが、私はずっと複数教員で合同ゼミを行っています。そこでは、あえて1つのトピックについて、対立と言葉がきついかもかもしれませんが、私はこう思う、私はこう思わないということを、学生の前で教員同士が議論してみせます。そうすることで、学生たちは、「ひとりの教員が絶対に正しい」と思うこと、「特定の学問的な方法が唯一である」と思うことから、距離を取ることができる。複数の視点で考えることができるようになるための、教育的な意義があるように思います。

私自身も「座談会」を見て、他の教員には自分とは異なる専門性があり、それぞれに興味深い専門知識を持っており、私が知らないことを知っている同僚がたくさんいる、ということを実感しました（あらためて言うまでもないことなのですが）。ですので、安心して、と言ったら語弊があるかもしれませんが、私自身の偏った狭い視野からの話を学生に伝えることができるように思いました。もしかすると私の学問的な方法論や考え方が、私の授業を受講した学生にはすっかりこなかったとしても、他の先生の専門領域によってカバーされることもあるかもしれません。自分の専門外の同僚の方がたくさんいる、その人たちと一緒に学生の教育を担当しているという信頼感があります。だから、目の前の学生に対して「自分が何とかしなければ」というよりは、「みんなで何とかすればいい」と思えます。

もちろん、逆のケースとして、他の先生にはあまりなじまないけれども、森岡のところだったらやりやすい、という学生もいるかもしれません。ですから、教員集団として、多様な学生たちを多様な教員で教育すればいいと思っています。願わくば、その「みんな」の範囲が、現代システム科学域を越えて、他の学部や機構の枠も越えて、全学の教員集団としての「みんな」の協力によって、全学の学生の教育が行われればいいと思っています。(章末スライド7を参照)

## 5. 現代システム科学域の今後のカリキュラム

新大学としては始まったばかりなので、このような「座談会」も今回が1回目、試行錯誤をしながら改善しなければなりません。さらに、年次進行で始まっていく今後のカリキュラムについて説明させていただきます。

後期、今まに行われている授業としては、各学類の必修科目として「知識情報システム学概論」「環境社会システム学論」「教育福祉学概論」「心理学概論」があります。「システムとサステナビリティ」科目群のように学域の1年生全員が必修で受講するものではなく、各学類に分かれて開講されるものですが、これらの概論でも15回目の授業時には、科目を越えて、他の概論に他学類の教員が出ていって、対面で議論することを予定しています。

また、現代システム科学域には「学域単位入学生」という、どの学類にも1年生の間は所属しない学生が60名ほどいます。現代的な諸課題への関心はあるものの、特定の学類を決めずに入学してきた学生が「システムとサステナビリティ」やすべての「概論」科目を受講しながら関心を深めていきます。その60名ほどの中で、2年次以降も特定の学問領域に限定されず、学類を越えて専門科目を受講し、複数の視点から卒業研究に取り組むことができる、未来デザインコース(FDC)というものも用意されています。今年度の1年生では、15名ほどが未来デザインコースの受講を希望しています。これは、学類に所属しながら特定の学問を学び、その範囲で卒論を書くのではなく、複数の、たとえば理系と文系の両方の教員から指導を受

けながら卒論を書いていく、それでもちゃんと卒業できるようなコースとなっています。今の1年生たちが卒業する時に、どのような卒論をこの未来デザインコースで書いていくのかは、まだ分かりませんが、理念としてはそういうものを実現するためのプログラムが、現在進行形で進められています。

また、3年生になった時に、PBL(Project Based Learning)演習という必修科目を設定しています。これは卒論のゼミとは別立てで、複数の学類から多様な学的背景や興味関心を持った学生が参加して演習を行う授業となる予定です。ですから、できるだけ学問領域を越えて、理系、文系を越えて、社会的な課題について、それぞれの視点から議論するための仕組みが、現代システム科学域のカリキュラムではたくさん用意されています。

課題としては、一つの科目に多くの教員が関わるため、まず時間割の設定をはじめとした教務に関わる運営はかなり大変です。また、学生が学問的アイデンティティを獲得しにくい、という話も聞きました。もちろん、全ての学生がそうではないと思いますが、たとえば文学や工学や経済学などと比べると「現代システム科学域」は(就職活動などで)対外的な説明が難しく、自分は一体何を研究しているのか悩んでいる学生もいるという話も聞きました。(章末スライド8を参照)

## 6. 大学教育の目的と「ほどよい評価(good enough evaluation)」

ここから先は少しだけ私の興味関心についてお話しさせていただきます。2週間ほど前の松下先生のお話を伺って思ったことです。

「大学教育の目的とは何か」などと大きな話をここでするわけではありません。ただ、自戒を込めてといえますか、自分もしばしば錯覚してしまうのですが、特定の指標によって測定される数値目標を達成することは、大学教育の目的にはなり得ないことは確認しておきたいと思います。それは、「論文の数」とか「外部資金の獲得額」が研究の目的にはなり得ないことと同様でしょう。数字ばかりを追いかけてしまうと、中学校の学力テストの学校別平均点を上げるために成績下位者を欠席させた事例のように、本末が転倒してし

まいます。もちろん数値化することによって、これまで把握できなかったことが見えるようになることにはとても意味があります。ただ、大学における教育の全てが数値化できるわけではありません。

ですので、教育、そして大学の価値を全て定量的に評価することはできない、ということをもまずは前提とした上で、それでは、何を数値化し、どこを数値化されないように余地を残すのか、数値化されない部分の中に積極的な意義を認めることができるのかというのが私の問いです。(章末スライド9を参照)

個人的な体験談について少しだけお話しします。久しぶりに数年前に卒業した卒業生と会って、私の授業はどうだったかという話になった時に、「ビデオが面白かった」と言われました。15回しっかりシラバスを書き込み、教材やプリントも苦労して作っていた授業の中で、40分か50分見せたNHKスペシャルか何かのビデオが一番印象的で「それ以外はあまり覚えていません」というようなことを言われて、うーんとなってしまいました。同じ機会に別の卒業生は、授業中の余談・雑談が非常に印象的だったそうです。私が何か「すごく良いこと」を言っていたそうなのですが、私としてはそのことをほとんど覚えていませんでした。私が意図的に話したことはなかったことが学生の記憶に残っていることが、非常に印象的でした。

私の授業が上手ではなかったかもしれないことはさておき、そもそも大学の講義や演習において、教員の意図が完全に学生たちに伝わることは、あり得ないと思います。他方で、それでいいのではないかと、むしろそれしかないのかもしれない、とも思います。大学教育においては、インプットとアウトプット（アウトカム）が相関するとは限らない、と個人的には思っています。(章末スライド10を参照)

短期的に、その15回の授業が終わった時点で、何か授業の目的が達成できることもあれば、達成できないこともあります。大学を出た後に、数年後、数十年後に振り返ったときに、授業で教員が言っていたことの意味が分かる、授業の内容が役に立つこともあれば、もしかしたら死ぬまで役に立たないこともあるでしょう。

「意図が何も伝わらなくて良い」「何の役にも立たな

くても良い」ということを前提にするのは無責任ですし、けっしてそのように思っているわけでもありませんが、現実には、その学生が授業から何を、いつ、どのように受け取るか（受け取らないか）を教員は把握できない、そういうものではないでしょうか。教員の意図（たとえばシラバスに記載された内容）をはるかに超えて、豊かな学びの成果を達成する学生がいることも、珍しいことではありません。ですから、短期的な評価自体を教育の目的とせず、数字ばかりにとらわれないことが重要だと思っています。

教育は、少なくとも現時点では、生身の人間同士による不定形で不確実な営みです。そのことには、ポジティブな側面もネガティブな側面もあります。アクティブ・ラーニングが得意な学生もいれば、座学が得意な学生もいます。個別の学生に対して、どういう入力（教育的働きかけ）をすればどういう出力（教育成果）が得られるのか、というのを事前に把握し尽くすのは、今のところ難しいと感じています。大学には、多様な学生と多様な教員、多様な授業のあり方が存在してもよい、というか、むしろ存在していた方がよいし、現に存在しています。ですが、「何でもあり」と言われると、一般論として（多くの学生に対して）良くない授業もありそうなので、そうではないのかもしれない。ですから、「何でもあり」ということではなかったとしても、どこまで不確実性や多様性を残す余地があるのかについて、みなさんで議論するということが自体がFD活動になるのではないのでしょうか。今回のように、他の部局の先生方の教育の試みを知ることは、とても貴重な機会だと思います。(章末スライド11を参照)

## 7. まとめ

まとまらないまとめかもしれませんが、複数の教員が、特定のテーマについて、プロジェクトベースで、それぞれの知見をもとに議論する様子を学生に見せるという試みには、それなりに手応えを感じています。「座談会」のなかには、領域横断的な視点が現れていると思えました。また、個人的には、他の教員が持つ専門性への信頼感を得ることができました。自分に合う学生もいれば、合わない学生もいるというのは、当たり

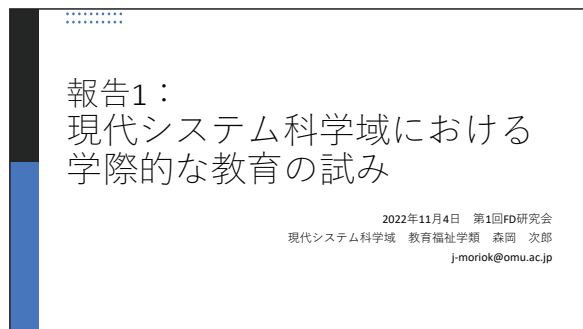
前のことですが、他の教員を信頼することで「自分に合わなければ他の先生に任せればよい」という気楽さを得られます。

また、教育には測れないことがある、という「あきらめ」や「開き直り」を、この大学の中でどこまで許容できるのか、どうすれば、そうした教育の「多様性」の「余地」があることに積極的な意味を見出すことができるのか、継続的に考えていければと思っています。「内部質保証」や「アカウンタビリティ」ということもきちんと念頭に置かなければならず、そこは無視できない問題だとしても、それでは、何をどこまで評

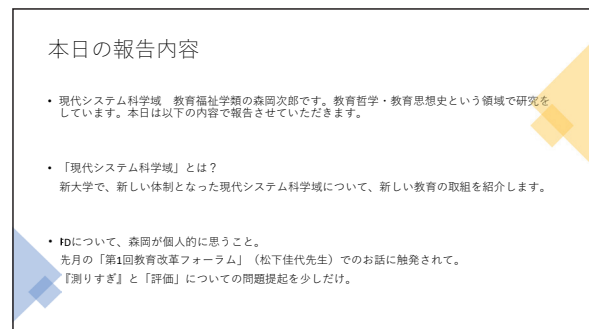
価するのか、しないのか、ということを考えなければなりません。

「上から（文科省）」や「外から（経済界）」という言葉は、松下先生のご発表の中での用語ですが、そうした圧力によって従属的に大学教育を改革するのではなく、私たち自身が主体的に、多様性を認めながらお互いに学び、大学全体としてよりよい教育を目指していける、そのようなFDの取り組みを続けていきたいと思っています。

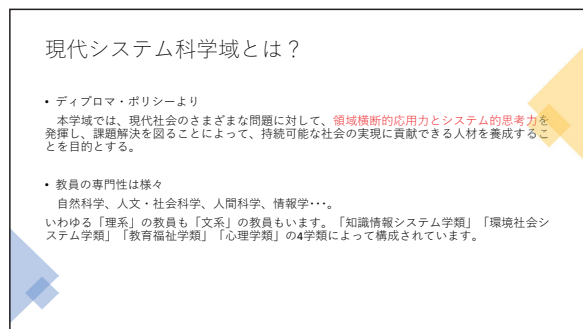
ご清聴ありがとうございました。私のほうからは以上です。



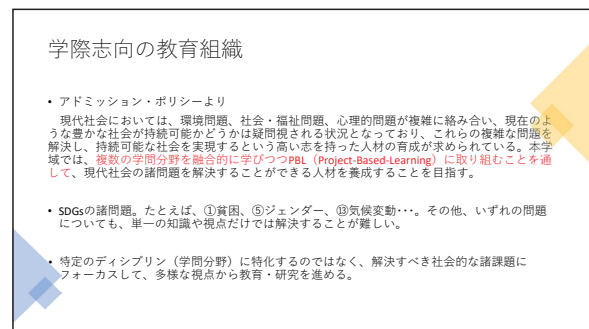
1



2



3



4

学際的オムニバス講義としての「〇〇システムとサステイナビリティ」

- 学際的に課題解決を目指す、というものの、教員はそれぞれの専門性を有しています。教員は既存の学的ディシプリンにとらわれている。
- そこで（？）1年生前期には、すべての学域生に必修の「学域共通科目」、システムとサステイナビリティ科目群を配属。（森岡は担当者ではないのですが）「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」
- 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うことを目指す。

5

第15回目の「座談会」について

- 4つの「〇〇システムとサステイナビリティ」は、複数の学類の教員が担当するオムニバス講義。
- その15回目の授業では、他の科目の担当者が登場し、「座談会」を開催。（たとえば「自然システムとサステイナビリティ」の第15回目に、情報、社会、人間システムとサステイナビリティの担当者が登場して議論する）
- 特定のトピックについて、各教員の専門性の観点から、また他の「〇〇システムとサステイナビリティ」で取り扱ったテーマと関連させながらコメント、議論。
- 学生は、複数の教員が同時に登場して議論する形式に、好感を持っている（ように思われる）。（残念ながら）今年度はオンライン授業。

6

「座談会」の教育的意義について

（当たり前ですが）世の中には、問題に対する多様なアプローチの仕方があること。ある特定の学問（方法論）が絶対ではないこと。さらに踏み込んでいえば「ある教員の言うことがかならずしも正しいとは限らない」ということ。

※（森岡の経験談。合同ゼミの場合）あえて、学生の目の前で教員同士が対立してみることも。

- 教員（ひとまず森岡）にとっての意義。これも「当たり前」かもしれませんが、他の教員の専門性を信頼すること。安心して、自分の偏った・狭い視野からの話を学生に伝えることができる。もしかすると、自分の学問的方法論は目の学生には馴染まないかもしれないが、きっと他の先生の領域によってカバーされるはず、という（実はあまり根拠がない）同僚（自分の専門外）への信頼感。「自分がなんとかしなければ」ではなく、「みんなできるとかすれば良い」「みんな」というのが、学部・学域を超えて全学的であることを願っています。

7

まだ1年目ですが、現代システム科学域の今後のカリキュラム

- 後期、各学類の「〇〇学概論」（知識情報システム学、環境社会システム学、教育福祉学、心理学）の第15回目に、前期と同様に科目を超えた担当教員の「座談会」を予定。
- 未来デザインコース（FDC）。現在進行形。1年次は学域に所属せずに入学している「学域単位入学生」が、自分の問題関心を多様な視点で深められるように、複数の教員で指導していく試み。
- 3年次の「PBL演習」。複数の学類から学生が参加する演習型の授業。課題としては、教務的な運営が大変……。学的アイデンティティの不安定性について（「就活」で自分の研究を説明するときに困る、という「苦情」も）。

8

大学教育の目的と「ほどよい評価（good enough evaluation）」について

- 「大学（本学の）教育の目的とは何か」などと大きなことをいえるわけではありません。ただ、自戒を込めて「特定の指標によって測定される数値目標を達成することではない」ということは、確認しておきたいと思います。「研究の目的」が論文の「数」や外部資金の「獲得額」ではないのと同様に。
- 全国学力テストの学校平均点を上げるために、成績下位の生徒を欠席させた「事件」。数値を目的とすると、本末が転倒する事例。
- これまで測れなかった（測らなかつた）ことを数値化することには意味があり、その数値も参考になる。けれど、数値化（可視化・見える化）できないこともある。
- 教育の（大学の）価値のすべてを定量的に評価することはできない、という前提を共有した上で、数値化されない余地を残すこと、それを積極的に認めることは可能でしょうか。

9

個人的な体験（失敗？）談

久しぶりに再会した卒業生の、私の授業の思い出。「ビデオが面白かった」

また、別の卒業生の感想。授業中の余談（雑談）の印象。「そんなこと言ったっけ？」

教育（授業）は、思い通りにはいかない。けれど、それで良い（ひとまず、それしかない）のではないかと。過度にビジネス用語で語りすぎないこと。大学は「サービス産業」ではなく、大学での教育は学問の奥深さや楽しさに触れさせる営み。

短期的（在学中）に成果が得られることもあれば、卒業後の人生において「役に立つ」こともあるかもしれない（ないかもしれない）。

10

### 評価自体が自己目的化しない（測りすぎない）ために

- 「教育」というのは、（少なくとも今のところは）生身の人間同士による、不定形で不確実な営みです。そのこと自体の肯定的側面も否定的側面もあります。
- 「アクティブ・ラーニング」が得意な学生もいれば、旧来型の座学の方が深く学べる学生もいる。多様な学生と多様な教員、多様な授業のあり方が存在してもよい・存在していた方がよいのではないかと（現に存在している）。
- では「何でもあり」なのか……。答えが出せずにいます。

「何でもあり」ではないとして、どこまで「不確実性」「多様性」を残す余地があるか。そのことを議論すること自体がFD活動になるのではないかと。  
今回のような、他学部・研究科のFDの試みを知ることは貴重な機会。

11

### まとまらない、まとめ

- 複数の教員が、特定のテーマについて、それぞれの知見をもとに議論の様子を見せる試み。領域横断的な視点。教員集団への信頼。  
「自分に合う学生もいれば、合わない学生もいる」と思えることの気楽さ。
- 数値ばかりを追い求めない。教育関係には「測れないことがある」という、「あきらめ（開き直り）」をどこまで許容できるか。
- 「何でもあり」と「多様性」の間で。  
「内部質保証」と「アカウンタビリティ」の問題。
- 「上から（文科省）」でも「外から（経済界）」でもなく、私たち自身が主体的に、「多様性」を認めながらお互いに学び、大学全体として「よりよい教育」を目指していけるようなFDの取り組みを続けていきたい、と思っています。

12

### 参考文献

- ジェリー・Z・ミュラー（2019）松本裕訳『測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？』みすず書房。
- ペーテル・エールディ（2020）高見典和訳『ランキング—私たちはなぜ順位が気になるのか？』日本評論社。
- 渋谷進（2022）『大学失格—『評価疲れ』と大学』『現代思想 第50巻第12号』青土社、53-63頁。

13

ご清聴ありがとうございました。

14